177

昭和二年十月三日

音声の出ないのは胸部に異常が有るのではないかとて　X光線を勧められ写真に撮った。何の異状もなく唯見苦しい骨の連鎖が有るばかりであった。X光線の前には貴賤貧富の別もなく、老幼男女の隔てもなく、美醜善悪の是非もない。今尽十方無碍光如来の光明の前には善悪浄穢の隔てもなく、大小凡聖の区別もなくは　修善逆謗の差別もない。一切の無明の暗夜、照破されて悪性の見苦しい死骸が見ゆるばかりである。

179

昭和二年十月五日

（別府入湯中）　福岡中学の学生、若松親友会、神戸女学校、高等農林の学生と、毎日毎日一泊宛で入替わって行く、遷り行く方は御存じないが、長らく滞在している方は、昨日は東の客を送り、今日は西の客を迎える事を知っている、かげろうは明日を知らない、蝉は春秋を知らない、私達は過未の相状を知り得ない、生々世々客舎の如く、転生六道水車の如く、変化それすらも知り得ない魂である。

無限の時間と　無辺の空間を生命としている大自然、宇宙を体験していらるる仏陀のみ無衰無変常住不変の世界より　真智を以って吾々を照らしていられる。　今や慈光に浴して感恩身に余り、横截五悪趣の名号に遇うて歓喜胸に満つ、報じても報ずべきは大悲の仏恩、謝しても謝すべきは師長の恩ではないか。

180

昭和二年十月六日

叫びたいこの信念、共に喜びたいこの歓喜、動く心の総てを照らし、不実の心の底まで清めて下さる威神力、若しも私に声が出るならばじっとしてはいないが!!　泣きたい様な　涙ぐましい様な、息づまる様な切ない気がする、静かに時の来るのを待たねばなるまい、仏様より休暇を戴いているのであるけれども、親様もう休むのに飽きました、人様も心配して下さいますから少し宛でも話さして下さい、多くの同行に対して破約の罪は八つ裂きに合ってもたりません、下関にも折尾にも、中村家にも大積にも、伯母の三年忌にも、大地に伏してお詫びせずにはいられない。

181

昭和二年十月七日

別府の温泉から帰って来た事を誰に聞いたのか、水城さんが一番に駆け付けて挨拶されるけれども一寸も声が出ない。嗚呼すみません　すみません、貴殿の声の出ない様に成ったのは　横着者の私がいる為でありました、このしぶとい私達を呼び覚ます為に喉が破れてしまいましたと泣かれる時には、私も熱い涙がぽろぽろと流れた。　なんの皆様の為に声が出なくなったのではない、仏様が法龍の身に一大事が有ってはならんから休まして下さったのだ。　心配なさらなくても直に治る、今月末までは充分療る自信がある。　それにしても声が出ないから皆さまに心配さして済まない。　誠の兄弟姉妹は心から泣き心から喜んでくれる、尊い愛の涙であり、清い慈悲の涙である。

182

昭和二年十月八日

恵まれている今日の幸福を感謝せずにはいられない、底の知れない親の念力を思うに就けても生命を投出しても叫ばずにはいられない。　肉体こそ五尺一寸九分であるけれども　精神は十方世界に満ちている。　弥陀の五兆の願行は法龍一人の為ではないか、真実功徳大宝海と満足さして戴いた不思議には愚図愚図してはいられない。　宗教の一大改革をやらなければな

らない、その前には必ず法龍の身に圧迫も有ろう、迫害も加えられよう、嘲笑も有ろう、罵倒も招こう、寒風に吹きまくられて　花は散り　葉は落ち　枝は折れ、一切の装飾は脱がされ　地位も名誉も棒に振る冬の来るのも予期している。人間の装飾は落とされても、心を弘誓の仏地で樹てた信念だけは待つ春の慈光に浴して再び延び延びと末代を照すであろう、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

１８６

昭和二年十月二十三日

人間は順境が幸福か　逆境が幸福かどちらとも知れない、小さい此の一生涯を見る時は名誉、地位、財産、家内安全　天下泰平が幸福であろうけれども、永遠に生きる道を忘れた時には　却って逆境に導く縁になるであろう。而し苦痛のどん底に落ちて　諸有人世の苦悩を痛切に嘗めた敗残者が、真理の探究に全力を注ぎ　永遠の生命を得た時は　却って光明の世界に導くであろう。両親兄と生き別れ、金銭は恵まれず、家は倒れ、病苦に悩まされ、信仰上の一大波瀾を招いた私は、悪人と口先だけで済まされぬ悪人である事を自覚し、進めば進む程暗の中に入り、泣き泣き求めた甲斐あって、今日の嬉しさは言辞や思慮を超越している、この妙味は自己を知らない善人の味わえない境地である。

１８７

二十五

真田先生が学校に行かれる時、同行が肩を撫で、敵討をせねばならんから撃剣を習いに行ったが余り上達したので、敵討を忘れて指南番に成ったそうなが、それではいけないぞ、と言ったそうな。　自分の魂の解決を付ける為に　僧侶に成る学問をして、上達して立派に成って　教人信ばかりして自信が抜けては駄目じゃぞの意味である。

自信の抜けた教人信は生花じゃから実はのらない。献立は立派に出来ていてもたべなければ腹は膨れない。御教化は並べても魂の解決が付いていなければ　学問の倉庫と同じ事である。

192

昭和二年十月三十日

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。私の様な我慢な不実な底の知れない悪性が　六字の主に成して戴いた嬉しさにはじっとしていられない。慶ぶなと言われても歓喜せずにはいられない。昔から所士、他所坊主と言うが、士は自分の所、坊主は他所でなければ人が尊敬しないが、私の様な極下手な説教を他所まで売りに行かなくても八幡の同行が売り切れない程買って下さる。自分の教田は荒れても、他人の田地の耕したい心しかない私が、今は他所まで手が廻らないから有縁の土地の八幡市や大積の同行を耕して、憍慢の凸凹を砕き、雑行雑修の雑草を抜き、自力疑心の小石を捨て、名号六字を植付けて、正定聚と花を咲かし、往生成仏の果実を結ばして上げねばならない。

194

十一月一日

十年乃至三十年位先輩の方々が司教に成られた新聞を見て、追々友達も出世するであろうが、自分も負けては恥であると言う競争心が飛び出した。

何が名誉じゃ　と心の底から冷水浴びされた様な叫び声、そうじゃ私には私の使命が有る、法龍には法龍の果たさなければならない義務が有る。何か、曰く、八幡市と大積は飢饉で飢えている。　旱天で渇いている。　自分一人の仮の名誉よりも人々の迷夢を覚まして上げなければならないのだ。　お母様が私を僧侶に成して下さったのは、偉い僧侶に成るよりも、身を捨てても人様を生かして上げる僧侶に　成る方が目的であったのだ。　学者に成るのもよいが、私は仏様から褒められる広大勝解の者に成ろう。

195

昭和二年十一月　二日

永らく音声が痛んで困っていたが、先日から少し宛話せる様に成り、今日頃では声が出るかとも思わない程よくなった。悪い時には気に掛るが　喉元過ぐれば熱さ忘るるで、信仰の煩悶の時は思うまいとすれども頭を離れず、求むるけれども聞き

切らず、捨てるけれども捨て切らず、忘れようとしても忘れ切れなかった此の心が親子の名乗を上げた一刹那から、私には有るのやらないのやら、握ったのやら握られたのやら取ったのやら取られたのやら、救われていて救われた力みもいらず、称えていて称えておらず、信じていて信じておらず、あーあ、よかったなあ、よい親じゃなア、私に対して無条件であるだけそれだけ広大な恩徳に泣かずにはいられない、やむにやまれぬ心が動く、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。